



青年海外協力隊マレーシア会 17号

新型コロナウイルスによる避難一時帰国

伊藤有紀子 (2018年度2次隊 障害児・者支援)

マレーシアのイポーに派遣されて約1年と半年、私は現在(2020年5月)日本に一時帰国しています。少しずつ感染を広げていた新型コロナウイルスの影響は、一瞬にして世界中にいる約1800人のJICA海外協力隊が一時帰国を余儀なくされるほどの事態となりました。今回は自身の活動内容ではなく、1人の協力隊員から見た50年以上の歴史で初と言われる一斉一時帰国の状況について説明したいと思います。

時は3月16日、マレーシア政府によって活動制限令が発表されました。マレーシアでは以前から感染者数は急増し、病院や店が次々と閉鎖していたので、この発表で隊員たちの不安は一気に高まりました。そして、間もなく全ての国の隊員が一時帰国することになりました。更に、再赴任できないことも想定して個人の荷物は全て撤去することになりました。いくつかの国において、国境封鎖により国外脱出のフライトがな



くなるという事態が発生していたのが大きな理由だと思いますが、急遽準備をし、すぐに部屋を引き払わないといけない状態になりました。実質一晩で大慌てで部屋や荷物を整理し、どうにかこうにか日本行きの飛行機に乗ることができました。

帰国の際に一番心配したことは、もし自分がコロナウイルスに感染していて、同居の家族にうつしてしまわないかということでした。しかし、私たちは空港到着後に近くのホテルで一泊した後、別の宿泊施設で隔離期間を過ごすことができました。そこでは、1日に2回の検温を徹底し、1日1回調整員さんに報告しました。施設には幸い少し身体を動かせるスペースがあったので、健康管理のために軽い運動などをすることができました。そこはさすが協力隊といったところでしょうか、狭いスペースの中でもランニングしたり体操をしたり、それぞれが積極的に身体を動かしてリフレッシュしていました。当然のことながら感染リスクを避けるために外部との接触禁止はもちろん、ゴミ捨てや洗濯でも細かなルールを守りました。閉塞感でストレスが溜まる環境だったと思いますが、個人的にはマレーシア隊員の仲間の存在のおかげで乗り越えることができたと思っています。



何よりも、緊急一時帰国のために起こりうるリスクを想定しながらフライトや空港までの移動手段、宿泊先などのありとあらゆる手配を整えて無事に帰国させてくれた調整員さんをはじめとするJICAマレーシアのスタッフの皆さん、前例のない事態にも関わらず柔軟に対応し快適に隔離期間を過ごさせてもらった日本のJICAスタッフの皆さんに心から感謝したいです。志半ばで活動先を離れた隊員、そしてマレーシアの友人との突然の別れに悲しい思いをしている隊員のためにも、1日も早く事態が収束し、またマレーシアで活動できる日が来ることを願ってやみません。

新型コロナの中、海外で、日本でOVは

新型コロナウイルスで世界が一変してしまいました。当たり前はいつまでも当たり前ではないのだということを実感させられました。OB・OGからそれぞれの様子をレポートしていただきました。

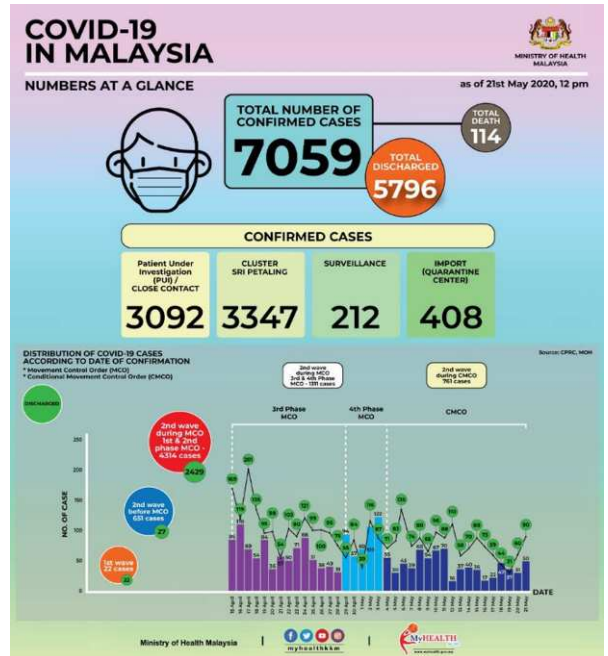
マレーシアにいる家族の体験

ご存知の方も多いと思いますが、マレーシアでは2月末に1.6万人のムスリムによる3泊4日の合同合宿を行い、これが大きなクラスター感染を起こすきっかけとなりました。この合宿は愚行という他はないのですが、その後の取り組みは見事だったとして各国から評価されています。

感染者は徐々に増え、3月15日は190名となり、17日には初めての死者が出ました。政府は16日にロックダウンを発表、18日から実施し許可なく外出した人は逮捕、処罰という厳しい外出制限令を施行しました。州をまたいでの移動は禁止、家族によると、車で必需品の買い物は一人と決められており、デリバリーもアパートの入りロゲート前までと決められていたので、配達人が列を作らねばならず、デリバリーのものを受け取るだけでひと苦勞だったとのことでした。必要最低の経済活動のみが許され、空気が徐々にきれいになったそうで

す。最初3月31日までだった外出禁止令は延長に次ぐ延長で5月12日までと延期され、さらに4月1日以降はサービス業の多くに営業時間制限も加わりました。ストレスだけではなく、非正規で働き困窮していた人も多く、NGOや政府機関が配食サービスなどを日々行いました。その中で5月4日からは条件付きで多くの経済活動が許可されるようになりましたが教育機関の再開はまだ許可されておらず、子供が在籍しているカレッジでのオンラインでの講義は12月まで続行されると連絡が来ています。また集団での祈りやオープンハウスも認められておらず、ちょうど今が断食明けのお祭りの時期ですが、例年とは全く違った静かなものになっている様子です。この条件付きロックダウンは6月初めまで実施予定です。(編集注：図は寄稿時に添付されていたものです)

四方照美 (平成6年度1次隊 理学療法士)



カナダから

志賀典子 (昭和55年度1次隊 幼稚園教諭)

私の住むカナダ北西部、太平洋に面するブリティッシュコロンビア州にコロナ感染者が出たのは1月28日でした。その後BC州では全国初の集団感染、感染死者が出ました。この時点で経済や人の交流で中国と強いつながりを持つこの州がカナダでのコロナ感染震源地となると予想されました。

現時点でカナダの感染者数は8万6千人を超え、死者数は7千人近い深刻な状況ですが、BC州は感染者数2千500人、死者161人に止まっています。これは多分に州政府が感染対策チームの最高医療責任者にSARSやエボラに詳しい公衆衛生専門の医師を選んだ成果だと思えます。彼女の知識や経験に基づいたアドバイス、判断、指示は誰もが合意、納得できるものでした。特に彼女の社会的弱者に配慮する姿勢は、今回のウイルス流行に見られがちな他人を疑い、自己中心になりがちな心情にブレーキをかけ、助け合い、理解し合うという風潮を州民に促しました。他の州は州首長と医療責任者の意思疎通がうまくいかずに対応が遅れ感染が激増しました。またカナダの感染死者の80パーセントは老人介護施設で起きています。これにより、多くの施設でのコロナ感染以前からの利益主義の経営体制が暴露されてきました。

カリフォルニアから

遠藤浩史 (平成 9 年度短期 システムエンジニア)

現在カリフォルニア州のロサンゼルス近郊に住んでおります。こちらの状況をお知らせいたします。

アメリカは世界一の感染国になりました。一時期は結構な勢いで感染者が増え、ロサンゼルス郡 (カリフォルニアが'国'ならば、'県'のような組織で、人口は1000万人に足りず、広さは関東地方くらいです。) ダケで、感染者 43,052 人、死者 2,049 人です。(MAY 22, 2020 現在)

3 月の中旬に州知事の命令で不要不急の外出は禁止、マスク着用が義務付けられ、日常生活も様々な制限が掛けられて、面倒な暮らしぶりになって来ました。レストランは店内での営業は禁止で、持ち帰りとお出前のみ可…という状態で、会社と同じ敷地にある「レストランなどの内装を請け負う会社」は、思いきり煽りを受けて、もう 2 か月以上閉まったままです。

企業も出来るだけ自宅勤務にせよ…とのコトで、私の会社も従業員 (と言っても一人だけ) は自宅待機にし、もう一人の経理の方は 3 月の初めに私用で日本に帰ったきり戻って来られなくなり、私だけがとりあえず出社しています。

子供の学校は 3 月の始め頃から休校になり、結局今年度末(6 月の始めくらい)までお休みにになりました。(…で、そのまま夏休み) 学校からはネット経由で課題が出たり、ネット経由で授業を行ったりしています。普段から課題やその他連絡などはネット経由だったので、大きな問題にはならなかったのですが、そうは言っても子供たちは生活が乱れ、夜中まで起きていて朝はなかなか起きない…なんて状態です。

まあ我が家は高校生なので、もうほったらかしておりますが、小さい子供のいる家庭は大変そうです。

街中も人や車がすっかり減り、出退勤時は道路が空いており、スムーズで良いのですが…。最近では感染者の増加が緩やかになり、これを受けてなのかどうか判りませんが、自宅待機に飽きてしまって結構その辺を徘徊しておられる方々をよく見かけます。暫くすると増加の波がやってくるのではないかと心配です。

というワケで、こちらもまだまだ騒ぎが収まりそうにありません。

私も時間は山ほどあるのですが、これといった何かを手伝えるでもなく、ただただおとなしくして拡散を防ぐようなコトしか出来ないのが残念です。一日も早く、みなさんが普通に生活できる日々が戻ることを祈っております。

フィリピンから

島本範幸 (昭和 54 年度 1 次隊 自動車整備)

釣り好きな人には天国のような海と隊員時代に聞き、海釣りを楽しもうとフィリピン・サンボアンガ市へ移住したのが 2013 年 8 月。そして反政府組織 MILF(モロイスラム解放戦線)が市中心部東側で内戦を始めたのが 9 月 9 日、彼らが占拠したエリアは我が家から 5km ほどでした。戦争中は MILF 兵を眠らせないように 24 時間、ヘリコプター・小型艦船・地上軍が順番に攻撃、約 3 週間で MILF は降伏。

サンボアンガ在住時は月に 10 回くらい地元漁師の漁船をチャーター(半日で 500 ペソ約 1100 円)。

ところが、複数の信頼できる友人達から誘拐組織が僕の生活パターンを調べ出したとの情報があり、即、釣りの中断とパラワン島プエルトプリンセサ市へ再移住を決断。

プエルトプリンセサにはヨットクラブがあり船を預かってくれるのでフィッシングボートを購入、封鎖が解除される 5 月 16 日から何時でも好きな時に釣りに行ける状況になっています。海の上なら安全だ!

Stay home の日本で

中嶋直樹 (昭和 49 年度 4 次隊 電子機器)

本の整理をしていて 40 年前に買った LAT に PC でぬりえをして遊んでみました。このコマは Jalan Tuanku Abdul Rahman のコロシアムの前にあるシルクセンターです。



オンラインで初の同窓会

4都府県のOV 5人で近況を報告

藤原 講平（平成22年2次隊 体育）

日本各地で外出自粛要請が続いていた5月4日、マレーシアOV有志が通信アプリのビデオ通話機能を使った同窓会を初めて開催。東京、大阪、福岡、岡山在住の5人がパソコンやスマートフォンの画面上に集い、飲食しながら互いの近況を語りました。

この同窓会は、2010(平成22)年度の元青年海外協力隊有志を中心に2013年に大阪で発足。以来、都内のマレーシア料理店をはじめ、京都や佐賀などOVと縁のある飲食店でほぼ毎年春か夏に開いてきました。時には、OV家族やシニア海外協力隊の他にJICAの企画調査員や専門家、派遣前訓練所の語学教師など当時の隊員と親交のあったメンバーも加わり、毎回5～10人が集まっています。

9回目となる今年は招集が困難であることから、筆者と共同幹事を務める早田（旧姓：齋藤）まりOV(2010-1/サラワク/青少年活動)の呼びかけでオンラインによる同窓会が実現。会では在宅勤務や子育て、転職など新たな環境で励んでいることなどを披露した他、マレーシアでの思い出話に花が咲く場面も。最後は、来年の再会を約束し2時間半のミーティングを終えました。



同窓会のスクリーンショット。画像が乱れてアプリを変更後、仕事を終えたOVI人も合流した（筆者：画面左下）

新型コロナ対応が早かった台湾で

中山天志（平成23年4次隊 コンピュータ技術）

キャリアチェンジを考えて昨年の晩秋に会社を退職、自由の身になったところ新型コロナが流行。この春は東京でステイホームしていました。

その直前の1月中旬から2月中旬にかけてフィリピン～台湾と旅行をしてきました。ルソン島の火山対策として出発時に購入したマスクが、台湾滞在中に役に立ちました。飲食店に入るときに検温や手の消毒が必要だったりと市中が危機感を持った対応をしていたことを覚えています。2月中旬に帰国した際に羽田空港へ降りた瞬間、

ほぼ対策ゼロだったことに違和感を禁じえませんでした。

マレーシアの対応は有名な日本人ミュージシャンが住んでいるため比較的知られていると思いますが、3月中旬からロックダウンが開始され5月初旬から何度か延期の末、徐々に解除されてきています。

日本での対応は諸外国から批判され、今後日本人がいつ自由に行き来が出来るようになるかは未だわかりませんが、これまで身近だった国々が

こんなに遠くになってしまう日が来るとは思っていませんでした。

今回の未知のウイルスへの対応で、国としてのあり方は経済発展の軸だけでなく、いかに市民を守る動きが出来るかという点も重要になってくるように感じています。

（写真上は台湾基隆の街中、下は基隆港に停泊中の件の客船ダイヤモンドプリンセス）



再びのサバへ

飯塚昌（昭和 59 年 3 次隊 サバ村落開発：家畜飼育）

2020 年 1 月上旬にヨルダンの JICA プロジェクトを終えて帰国し、2 月末にマレーシア国サバ州を協力隊派遣から 35 年ぶりに再訪しました。残念ながら今回の滞在は短く、かつての任地である Kudat 地区 Bangau 村訪問はありませんでしたが。

記憶の中では「変わらないカンボンの風景」と思っていた州都コタキナバル（KK）の街並みは空港到着からすっかり一変して、まるで「おのぼりさん」状態で垢抜けた建物を見上げながら時代の流れを実感しました。KK の街並みや地理感覚だけでなく、困ったのはマレー語が喋れないもどかしさで、哀しいかなどうしても英語とのチャンポンになってしまうのです。それでも、KK 名物のナイトバ



ザールは健在で、昔のように古着を売ってしていました。先輩隊員から日本からクリーニング屋流れの質の良いシャツがあるのを聞いて自分でも探すようになっていたのを思い出しました。今は静かなバザールですが当時はカセットテープレコーダーで小林明子の「恋に落ちて」という曲が大音響で流れていたのをフッと思い出しました。たった一晩でしたが、一人で観光客相手の夜店や魚市場を冷かしながら夕食にインドネシアのガドガド料理にクラバ（ヤシ）の実のジュースを飲み、サバ州独特の形の懐かしいドリアンを食べる事もでき満足しました。

今回のサバ訪問はサバの立地条件を活かした開発計画に関して州開発局等との協議が中心でしたが、滞在中にマハティール首相が退任するニュースが流れ驚きました。

私の隊員時代も彼がマレーシアの首相時代でした。初の国産車「プロトンサガ」がデビューし高層ビル「ダヤ・ブミ」がオープンしたころだったのです。

私は学生時代に 1 年間休学して、米国の中西部へ酪



農実習に行き、すっかり米国式大規模農業に魅せられていた私が協力隊に応募したのは卒業後就職した養豚会社から別の世界が見たくなったからです。

選考試験の結果から派遣前研修の前に他の 4 名と八ヶ岳農業実践大学校に半年間の技術補完研修に送り込まれました。派遣はアフリカだと思っていたらマレーシアで豚を飼うように言われた時には驚きました。

帰国してアセアン青年招聘事業の研修管理員（マレイ語）に関わり、更に JICA プロジェクト調整員としてフィリピン、イエメン、ネパール、カンボジア、ウズベキスタン、ザンビア、ベトナム、カンボジア、ヨルダンと関わってきましたが、よくよく考えるとここ「サバ」こそがその後の私の活動の原点だったように感じます。

残念ながら、私がサバから帰国すると新型コロナウイルスのパンデミック拡大でマレーシアも国境封鎖となり開発事業が停滞しています。いずれにしても今後、自分がお世話になったサバだからこそ恩返しができるのか「巣ごもり」しながら思案しています。

マレーシアからのメール

スレンバンで家族 8 人と暮らす市川れい子（昭和 59 年 1 次隊 幼稚園教諭）さんから、今度のコロナのことでは、たくさんのことを学びました。そして、コロナ対応ではマレーシアを大変誇らしく思い、マレーシアに住んでいてよかったと思いましたとメールをいただきました。

一時帰国中・派遣前隊員の国内での活動について

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響を受けて、派遣中の全隊員が一時帰国され現在ほとんどの方々
が自宅等で待機中（約 1,800 名）です。そんな状況の中、この度、JICA 青年海外協力隊事務局から待機中隊員お
よび派遣前隊員に対する国内での社会貢献活動について、マレーシア会など関係団体に対し情報提供の依頼があ
りましたので、ご紹介すると共に会員の皆さんからの情報提供をお願い致します。

以下、協力隊事務局から文書（2020年5月19日付、JICA 青年海外協力隊事務局長⇒マレーシア会、一部抜粋）

一時帰国中・派遣前隊員の国内での活動にかかるご支援のお願い

今般の世界規模で新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を踏まえ、JICA 海外協力隊に関しましては、
派遣中の隊員を全員一時帰国させております。また、新規隊員や隊員に応募いただき合格された方の今後の予定
についても大幅に延期することとなりました。今後の帰国中隊員の再赴任及び新規派遣等の見通しについては、
新型コロナウイルス感染症の発生状況を含む派遣国の状況も確認の上、検討してまいります。同時に、社会貢
献意識の高い JICA 海外協力隊員に対して、日本国内で待機している期間中にも、国内各地で活躍の場を提供し
たいと考えております。そうした中、国内各県で本事業を支援いただいている方々からも、待機中隊員に対し、
国内で活躍できる機会を提供したいというご支援の声もいただいております。そのような隊員の熱意と地域の
皆様のニーズを繋ぎ、双方の皆様にとって有意義な機会を作るお手伝いができたらと考えております。つきま
しては、皆様から帰国中・派遣前の隊員にご提供いただける活動機会がありましたら、情報提供をお願いいたし
ます。

1. 想定される活動機会の例

- (1) 地域貢献活動（農業支援等） 労働力不足に悩む地域産業における待機中隊員の短期就業
- (2) 地域貢献活動（ボランティア、イベント実施） オリパラホストタウン事業等地域での事業への協力、
地域でのイベント運営にかかるボランティア活動等
- (3) 地域の企業・団体等におけるインターンシップ 地元企業等でのインターンシップや期限付き雇用の
機会提供

2. 活動可能な期間の目安：隊員によって異なりますが、待機期間は概ね 7 月末～8 月上旬までとなっ ているため、7 月末までの活動についてはより多くの参加希望者がいます。

いただいた情報は任期が終了した隊員等にも提供予定であり、8 月を超えて就業可能な方もおりますが、
参加希望者は絞られてくる可能性があります。

3. 隊員への情報提供方法：活動内容によりフォーマットがありますので、地元の JICA 支部へご相談ください。

JICA からの依頼を受けて

当会北海道ブロック担当でもある金子正美 OB が会長である北海道青年海外協力隊を育てる会では、コロナ
禍により一時帰国や任期短縮を余儀なくされた JICA 海外協力隊員の生活安定化に向けた支援策として、求人情
報等の登録フォームを開設し、同会 Facebook で公開しています。

その経緯は、隊員の一時帰国が始まった 3 月より道内の企業や経済団体等と意見交換を行い、支援準備を開
始し、協力隊北海道 OB 会や ICA 北海道と連携して、開設に至っています。（協力隊を育てる会ニュース 2020、
6 月号一部抜粋）

あれから 30 数年、今も日本語教育の世界で…

坪山由美子（昭和 59 年 1 次隊 日本語教師）

議員立法ができたり、労働力不足で外国人材がトピックになったりで、「日本語教育」ということばが目
に耳に触れることが以前より多くなったように感じます。「日本語を教える」などという職業があることを
知ったのは 20 代のころ、遙か昔のことです。教え始めてまもなく協力隊に参加し、そして、現在は事務局
で日本語教育分野の技術顧問をしている自分を不思議に思います。

マレーシアのマハティール首相が打ち出した Look East Policy 一環で、マレーシア人の日本留学、大学の
予備教育だけではなく中等教育機関でも日本語教育を始めようと協力隊に協力要請がありました。私はその
最初の 6 校の一つ Johor Bahru の中等学校 Sekolah Tun Fatimah が活動の場でした。Johor Bahru はいまでこ
そ洗練された都市になっていますが、当時は緑に恵まれてはいても雑然とした州都で、その中心部から少し
外れた丘陵に学校はありました。初代でしたから、学校側も日本人教師を受け入れるのは初めて、図書も何
もなく、あるのは日本から贈られた教科書だけ。日本語の授業は午後と夜。1984 年のことです。それから
35 年、今では百数十校でマレーシア人の先生が日本語を教え、マレーシアの日本語学習者数の半数以上を



アロースターの中等学校での日本語授業の風景

占める生徒たちが勉強しています。

協力隊の派遣は約 8 年間 100 名ほどで、
今振り返ると、一つの壮大なプロジェクト
でした。そして順調に進んだ背景には、
重点的かつ効果的に隊員を派遣した事
務局の存在、マレーシア政府が日本にお
んぶにだっこではなく主体的にかかわ
ったこと、そのときどきの状況をふまえて

派遣隊員が派遣時に求められる役割を十分理解し活動したこと、またそれができるようにした JICA スタッ
プの存在があります。このうち一つが欠けてもうまく行かなかったと思います。
今では「日本人の力がなくても私たちでできます。」と言えるほどに自信と能力
を備えたマレーシア人教師が中等学校の日本語教育を支えています。国際交流基
金の専門家として赴任し、それを目にしました。

現在協力隊事務局日本語教育分野の技術顧問になって 5 年目に入りました。協
力隊の枠組みがここ数年で変わったり、海外から求められる活動内容が多岐にわ
たる一方、応募者数が伸び悩んでいたり、悩ましいことも少なくありませんが、
海外の日本語教育と関り続けています。そして、ほぼ同時に直接学生に教えるよ
うにもなりました。長い間国際交流基金で日本語教師を対象とした研修にかかわ
っていたので、学生に教えるのは久しぶりのことです。日本人学生、留学生とは
親子以上の年の差となつてはいますが、学生に刺激を与え与えられ、そして、そ
の日の授業のできに一喜一憂する日々を過ごしています。

（2020 年 3 月 10 日記）



お願い*****

帰国後の活動状況など、マレーシア会事務局までお寄せください。

前回総会での提案事項についての結果 報告

第五回総会(2019年9月)において「ボルネオの自然保全に対して会として何かできないか」との提案がありました。結論が出ないまま、今後の役員会で詰めていくことで了解を得ました。

2019年10月から3回にわたり、定例の役員会で(1)寄付、(2)視察、(3)その他に分けて討議し、また総会での意見について関係者とも議論を深めてまいりました。(1)本会自体がボルネオ保全トラスト事業に関わることが力量的に困難であること、(2)事業が多岐にわたっているため、またほかにもいろいろな団体がボルネオの保全活動をしていることから、個人の立場で選択・支援すること、で結論を得ましたのでここに報告致します。会員の方には、ご期待に応えきれない結果でありましたこととお詫びし、今後も自由闊達なご意見をお待ち致します。

協力隊まつり 2020

毎年4月に開催される協力隊まつりは、今年は新型コロナウイルスの影響で残念ながら中止となりました。一部協力隊まつり応援オンラインイベントとして開催がありました。興味がある方は下記URLでご覧いただけます。

<https://youtu.be/sIRHHJyZlmg>

グローバルフェスタ 2020

毎年秋に開催されるグローバルフェスタですが、今年は新型コロナウイルスのため、残念ながら、中止が決定されました。

「福島の今を世界に発信する映画を マレーシア人と撮影するプロジェクト」

平成27年1次隊中鉢典子 OG の上記に関するクラウドファンディングはメール配信でお知らせし、多くのOB・OGの方々からのご協力を得て、目標額を達成することができました。

中鉢 OG からもお礼の言葉が寄せられました。

東北地区集会

今年の秋に予定していた当会の東北地区集会は、コロナの状況をみながら、開催時期を決定したいと思います。

寄付のお礼・・・ありがとうございました！

大西益吉郎氏(昭和49-2)より12,000円の寄付をいただきました。いつもありがとうございます。活動費として、大切に使用させていただきます。なお、寄付は随時受け付けています。よろしく願いいたします。

振り込み先：

郵便局記号：10140 番号 51611341

(郵便局外から振り込みの場合：店番 018、
普通口座 5161134 です)

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会
代表 白山 肇

事務局からお願い：住所、メールアドレスを変更された時は下記連絡先までお知らせください。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と2010年の青年海外協力隊OB/OG会出席者にEメールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在620余名となりました。まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会
会長 白山肇

162-8433

東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5

JICA 地球ひろば メールボックス 51

TEL：090-7186-1065 (国際協力サロン)

MAIL：malaysia@ics-together.com

https://ics-together.com/office_jocvmalaysia.html

(2020.6.30 発行)